

著者 フランシス・トレヴィシック (1812-1877) の紹介

(2023年1月23日、山内庄司)

本書の著者のフランシス・トレヴィシック (Francis Trevithick) は、発明家リチャード・トレヴィシックの3男であり、6人兄弟姉妹の5番目であった。父リチャードが南アメリカへ旅立ったとき、父は4歳であったフランシスを肩に乗せてカムボンからペンザンスへ歩いて行き、そこから捕鯨船に乗り込んだこと、その11年後、フランシス15歳の時、通っていた故郷のホドミン・スクールへ、帰って来た父が不意に現れたこと、などが本書中でエピソード風に触れられている。

フランシス自身は、1840年頃までに鉄道・機関車の技術者となっていて、グランド・ジャンクション鉄道 (GJR)、および統合後のロンドン & ノースウェスタン鉄道 (LNWR) で各地の機関車工場の監督者を勤めた。1857年に退職後、故郷のコーンウォールへ帰った。

コーンウォールでは祖父が鉱物代理人を務めていたテハイディ地所の代理商となる傍ら、2巻にわたる父親の伝記 (本書) を書き、1872年にそれを出版した。その5年後の1877年10月27日にペンザンスで死去した。

フランシスの子供たちの多くも鉄道技術者となった。そのうち、フランシス・ヘンリー (Francis Henry) ・トレヴィシック (1850-1931) およびリチャード・フランシス (Richard Francis) ・トレヴィシック (1845-1913) の二人は、相前後して日本政府に招かれ、それぞれ官設鉄道新橋工場および神戸工場で機関監察方として黎明期の日本の鉄道の発展に貢献し、神戸工場の日本初の国産蒸気機関車 860 形その他の製作にも携わった。

書籍「リチャード・トレヴィシック：技術者およびその人物像」を著した技術史家のディキンソンらはその序文で、フランシスのこの著書について次のように述べている*¹。

本研究のための資料のほとんどは、1872年に2巻の大作として出版された息子フランシスによる伝記から得たものである。この伝記を掘り下げてみた人は、彼が記録した大量の資料には大きな恩恵を感じたに違いないが、文書の批判的な吟味が不足していること、繰り返しが多く相関関係がないことから、この伝記を習得することを最も困難なものにしていると感じたに違いない。これはある程度、その作家 (フランシス) が、時系列の流れを彼の父の発明の一つ一つの扱いに従属させたという事実に起因している。

----- 著者らは、その作家は自分の知識と信念の限りを尽くして正直に自分の問題を提示している一方で、父親の記憶が受けていた軽視の感覚の下で心を痛み、父親が寄与に関与した主題でいくつかの誇張された主張がなされていることをも、認識していた。

ディキンソンらの指摘するように、確かに歴史的な評価としてはやや誇張とも思える記述が随所に見られるが、それは世間的な名声と富に無頓着であった父に対するフランシスの強い思いであり、そのことも含めて貴重な資料であると考えてできる限り忠実に本書を邦訳した。

ただし、本書は書簡や回想 (聞き取り) による説明が中心であり、記述が前後に散在してまとまりに欠け、ディキンソンらの指摘するように、「この伝記を習得することを最も困難なものにしている」。さらに、原書には章の区分のみであり、節の区分がなされていないことも読みづらくしている一因と考えられるので、翻訳に当っては、目次に列挙されている各章のキーワードを参考に、訳者の判断で節の区分を追加した。節のタイトルは読み易くするための単なる目安である、と考えて頂ければ幸いである。

*¹ H. W. Dickinson and Arthur Titley, "Richard Trevithick: the engineer and the man", Cambridge, 1934.
<http://sho-yama.c.ooco.jp/trevithick/index.html> の翻訳参照。